

安政大地震をえがいた 鯰絵解説



いけど おおしん
生捕りました三度の大地震

鹿島大神宮の神様が、生捕りにした三匹の鯰に縄をかけ蒲焼屋に連行したところ、地震で儲けた大工、とび職、左官、屋根師、絵師の五人が、どうか助けてやってくれと頼んでいる。三匹の鯰は大きさの順に、善光寺地震(1847年)、安政地震(1855年)、小田原地震(1853年)を表わしている。しかし、職人たちの願いは聞き入れられず、神様は鯰を断固として許さず、「ふたたび地震がおきないために、なべ焼きにしろ」と命じて幕となる。地震鯰、鹿島大神宮、職人、蒲焼といった画題のほとんどを組み合わせた鯰絵の秀作である。(東京大学地震研究所 所蔵)



わらおお
しんよし原大なまずゆらひ

遊郭のあった吉原は、明暦大火(1657年)のあと、浅草の水田を埋め立てた軟弱地盤の上に移転されていた。廓のもっともにぎわう夜十時ごろ激震におそわれ、直後の出火により廓内が全焼、遊郭と外を結ぶ橋も落ちて逃げ道が限られたため、630人におよぶ遊女たちが焼死した。この鯰絵では、吉原の遊女や遊客たちが大鯰を捕えて、遊女に仕える幼女は小鯰を捕えて、口々にののしりながら、なぐる、打つ、けるなどして地震のあだ討ちをしている。左上では職人たちがこれを止めようと、とんできている。一方、鯰は「おいらんたちにのられてうれしいよ…、またゆすぶるよ」と喜び、おどけている。このように自然現象である地震に対するやり場のない怒りを、擬人化した地震鯰にぶつけることで、はらしているのである。(東京大学地震研究所 所蔵)

解説文は、「安政大地震鯰絵」(国公立所蔵史料刊行会、1979)と「鯰絵—震災と日本文化」(宮田登・高田衛監修、1995)を引用・参照し、加藤茂弘(兵庫県立人と自然の博物館)がまとめた。



じしん けおつ
地震どう化大津あぶし

大津絵は、江戸時代の初めに近江国大津で売り出された民衆絵で、無名の画家が画いたものである。民俗信仰や伝説と結びついた戯画や仏画であり、かんたんな筆彩りで、奔放に画かれた。この鯰絵はその画法を写し、瓢箪でおさえつけられた大鯰を中心にいろいろな人々を画き込み、これを大津絵節という節回しで「どう化」して、大工や左官、芸人などの庶民が強く「世直し」を願望していることを表わしている。文中にはしゃれも入り、庶民の気持ちを十分に引きつける力がある。「八方へ燃え…十方にくれます」と生活の途方にくれ困ることにしゃれる。さらに絵中の「祭りの跡で又永やすみ」には、政は後回しで永やすみと、幕府の無為無策ぶりへの痛烈な皮肉がこめられている。

(北淡町教育委員会 所蔵)



たいへい ごおんたく
太平の御恩沢に

人々が鯰をなぐったり、髭を引っ張ったりしてこらしめている。左下でも子どもが子鯰をこらしめている。一方で、地震で恩恵を受けた職人たちや瓦版売りは鯰をかばっている。鯰の脇には瓢箪がころがり、猿が倒れている。これは猿が瓢箪で鯰をおさえるという大津絵の一つを意識しており、今回の地震は、鯰をおさえているはずの猿が瓢箪の酒を飲み、酔って寝てしまったために起こったということを示している。詞書きもしゃれている。地震を「なへ」と読ませるのは、神代の時代より地震の呼び名であった「なる(地)ふる(震)」を受けたもので、それに続くパロディー化した君が代の歌にかけられている。この歌の後半に「かなめいし(要石)の いはほ(巖)ハ ぬけ(抜)じ よし ゆるぐとも」とあり、「揺(ゆる)るぐとも よもや抜けじの要石 鹿島の神のあらんかぎりは」という有名な地震歌をしゃれたものである。

(北淡町教育委員会 所蔵)

